

中務集注釈（五）

古今集歌人伊勢の娘、中務の家集を取り上げ、注釈を試みる。本稿では、本紀要前号「中務集注釈（四）」に続き、二〇四番歌～二三九番歌を扱った。当該部分では中務自身による源順、源景明らとの贈答歌ばかりでなく、中務の娘である井殿、孫である大納言の君、法師、光昭、またその夫や妻である相如、麗景殿の宮の君の間での贈答が収載された箇所である。こうした家族との贈答や、晩年になっての交際の様子を表す歌群の多くは、資経本（御所本の親本）の特有歌であるが、詞書に回想の助動詞「き」の多用が指摘されていることも合わせ、二類本が中務自身や中務に親しい者によって最初の形態が作られた可能性が言及されてきた。

また最近、妹尾好信氏は、二類本の巻頭に近い「正月山里詠歌」と巻末に近い「贈為基詠十二首」を対象にした二類本の成立についての論文で、中務の晩年における自撰家集の編纂についても触れ、中務の死によって、その意志を継いだ編者がいたものの、中務の意図を十分反映した家集にはならなかったと指摘された（第二類本『中務集』の成り立

高野晴代・高野瀬恵子・加藤裕子
森田直美・斎藤由紀子・遠間倫世
曾和由記子

ちについての試論―「正月山里詠歌」と「贈為基詠十二首」の位置づけを中心に―」（『国語と国文学』八七（二）二〇一〇・一）。

本稿においては、詠者同士の関係を押さえ、中務をめぐる人々の詠歌方法を探ることによって、歌人中務の周辺ゆえの和歌を巧みに扱う姿を読み取ったが、こうした家族同士の贈答などを家集に残すことが、編者の強い意志だったと推測される。次回以降、成立についても注釈を通して考えていきたい。

本稿は、研究会での発表、討論において問題となった歌を中心に抜粋し、注釈を施している。また、歌の解釈に問題点が少ない歌に関しては、校訂本文と通釈のみ記した。

「中務集注釈（一）～（四）」について、ご教示を賜った皆様に深く感謝申し上げます。

各歌の文責を次に示す。二〇四～二〇六・二二五～二二六番（加藤）、二〇七～二一〇・二二七～二二九番（斎藤）、二一一～二一三・二三二

二三四番(會和)、二二七～二二〇・二三五～二三七番(高野瀬)、二一四～二一六・二三〇～二三二(遠間)、二二一～二二四・二三八～三九番(森田)。

凡例

- 一 本注釈は、資経本(冷泉家時雨亭文庫編『資経本私家集二』朝日新聞社二〇〇一年所収)を底本とする。
- 二 本文の校合に用いた本は、以下の通り(一)内は、異同を掲出する際の略称)。

宮内庁書陵蔵本(510・12)(御) ※原稿中では、御所本と称す。

西本願寺本(西)

前田家旧蔵 現出光美術館蔵 伝西行筆本(前)

奈良女子大学蔵歌仙家集本(歌)

- 三 和歌本文は読解の便のため、適宜仮名を漢字に、漢字を仮名に改めた。また、詞書内には必要に応じて句読点を施している。校訂した箇所や仮名漢字表記を改めた箇所は、右にルビで底本での表記を示した。

四 底本を校合本によって校訂した箇所は、「語釈」もしくは、「補説」に、その理由と共に明記した。

五 歌の解釈に問題点が少なく、「異同」「他出」「語釈」を記さない歌に関しては、校訂本文と「通釈」のみを記載する。

六 本注釈に類出する先行研究論文は、以下の略称を用いる。

- ① 稲賀敬二氏『女流歌人 中務―歌で伝記を辿る―』(新典社 平・二二) ↓ 『女流歌人中務』

② 木船重昭氏『中務集相如集注釈』(大学堂書店 平・四) ↓ 木船注釈

二〇四番歌

紙帖かみでぶに針はりさして、人のがりやるとて

紙帖かみでぶのいつはり耳みみに聞ききしかどへだて心こころはまとなかりけり

〔異同〕 なし(底本・御所本のみ所収歌)

〔他出〕 なし

〔語釈〕 ○紙帖 紙を横に長く継いで折りたたみ、綴じていない本。折本。当該歌の場合は、相手から送られてきた文を折り重ねたものか。それを針を刺して送ったのであろう。○人のがり 人の許へ。「梅の花ををりて人のがりやるとて(友則・三) 詞書」。○いつはり 事実でないこと。嘘。「頼めつつあはで年ふるいつはりにこりぬ心を人はしらなむ(古今・恋一・六一四 躬恒)」のように、恋愛における相手の不実を責める歌に詠まれることが多い。当該歌では「五針」を掛ける。「いつはり」と「五針」を掛けた先行例に「いとこなりける男によそへて人のいひければよそながらわが身にいとよるといへばただいつはりにすぐばかりなり(古今・雑体・一〇五四 くそ)」がある。○耳に 「針の糸を通す穴」の意を掛け、ここでは五針の縁語となる。「いと使いよき手作りの針の、耳いと明らかなるに(『うつほ物語』俊蔭)」。○へだて心 当該歌の場合、うちとけてくれない相手の心をさしているのであろう。○まとなかりけり 木船注釈では、この部分を「纏はざりけり」と意改し、「糸を纏わなかった」と解釈しているが、底本にしたがって「的」

の意に解することとする。「同じ御とき、御屏風に」三月、桜の木のもとに徒弓射る／心にもいるひの弓は山ならぬ花のあたりにもとぞこたふる(忠見・一八)」。当該歌では、相手の気持ち隔たっているために、的に針を刺そうにも刺せないと詠み、相手の不実を恨んでいるのである。

〔通釈〕 紙帖に針を刺して、人の許へ送ろうと思つて

紙帖に刺した五針ではないが、紙帖に書かれたことが偽りであると耳に聞いたけれども、うちとけないあなたの心には針を刺す的がないことだ。

〔補説〕 紙帖の自身はさだかではないが、相手から送られた手紙と解した。そこに書いてあったことがすべて偽りであった、つまり相手が浮気をしていると噂に聞いて、紙帖に針を刺し、それに相手の不実を責める歌を添えて送つたのだろう。

二〇五番歌

京極院の桜おもしろきを、夕暮にむすめの公達とめで見るに、蛇のはひのほりければ、ことさめて、昔めでけん人にやなど

花の色は昔ながらに見し人のかたちはことになりけるかな

〔異同〕 むすめ↓む□□(御)(底本・御所本のみ所収歌)

〔他出〕 なし

〔語釈〕 ○京極院 のちに藤原道長の邸宅となる土御門邸のことか。土御門邸は、東京極大路に面するので京極殿、京極院と呼ばれた(『栄花物語』巻八に「京極殿」、『百鍊抄』第四に「京極院」と記載あり)。道

長の所有となるまでの経緯については、『王朝文学文化歴史大事典』(笠間書院)によると二つの説がある。一つは右大臣源重信の邸宅であったものを姪の倫子が伝領し、藤原道長所有となったとする説、今一つは藤原朝忠から女穆子へ、その夫左大臣源雅信から女倫子へという経路をたどって道長所有となったとする説である。当該歌の時点において、誰の所有であったか定かではない。○公達 貴族の若い子弟。男子をさすことが多いが、女子についてもある。「むすめの公達」とあるので、ここでは女子をさすか。「承平五年十二月に左衛門督殿の男女公達のかうぶりし、裳着たまふ夜、殿／今までに昔の人のあらませば諸共にこそゑみてみましか(貫之・八五〇)」。○蛇 へび。『和名類聚鈔』に「和名倍美一云久知奈波」と見え、「へみ」あるいは「くちなは」と呼ばれた。○ことさめて 興をそがれて。興ざめして。○昔めでけん人いや 蛇を、昔桜を賞美した人と見た。何かに執着したことによって蛇に生まれ変わるといふ話は多い。当該歌よりも後の時代のものであるが、『今昔物語集』巻第十三には、橘の木に執着したことによって蛇に生まれ変わった僧の話や、紅梅に深く執着した西の京の女が蛇に生まれ変わることだといふ話が見える。当該歌によって、蛇に生まれ変わる話の淵源を遡ることができ興味深い。○かたちはことに 姿がすっかり変わったこと。出家姿になることをいう場合が多いが、当該歌の場合は昔この桜をめでた人が蛇になったことをいう。

〔通釈〕 京極院の桜が美しく咲いているのを、夕暮れに娘の公達と賞美して見ていると、蛇が這い上つていたので、興ざめして、昔桜を賞美した人であろうかなどと言つて

花の色は昔のまま変わらず、昔花を見た人の姿はすっかり変わつてしまつたことだなあ。

〔補説〕 当該歌は、『後撰集』（春下・一〇二）、

元良の皇子、兼茂朝臣のむすめにすみ侍りけるを、法皇のめしかの院にさぶらひければ、えあふことも侍らざりければ、あくる年の春桜の枝にさして、かのさうしにさしおかせ侍りける

元良皇子

花の色は昔ながらに見し人の心のみこそうつろひにけれ

と第三句目までが完全に一致する。同時代詠であるので、どちらかが意識して詠んだのであろうが、前後関係ははっきりしない。

二〇六番歌

その夜の夢に、白き衣のすすけたる着たる女の、「昼のたまひつることは、『さのみききこしやしろこそ』と、ふることをこそいひけれ、あな心憂や

天の川めづらしきこと多かりとよこそこのごろさわぐといふなれ

〔異同〕 詞書↓つきさはかくころ本（西）、月のさはく心（前）、つきさはくころ（歌）、よこそよひそ（前）、このころ↓このころ（西・前・歌）、さはくといふなれ↓さはくてふなれ（西）、さわくてふなる（前）、さはくへらなれ（歌）

〔他出〕 なし

〔語釈〕 ○すすけたる 古びて汚れて黒ずむ。○さのみききこしやしろこそ 「ねぎ事をさのみききけむやしろこそはてはなげきのもりとなるらめ（古今・雑体 誹諧歌・一〇五五 さぬき）」を引用したもの。○ふること ここでは古歌を指す。○心憂 夢に見た内容をいとわしく

思つてのこと。

〔通釈〕 その夜の夢に、白い着物の古びてよこれているのを着ている女が、「昼おっしゃったことは『さのみききこしやしろこそ』ということですね」とそんな古歌を言ったのだった。ああ、なんていとわしい。

天の川はめつたにないことが多いと、世間ではこの頃騒いでいるということです。

〔補説〕 詞書と歌の関係が理解しにくい。「その夜の夢に」あな心憂や」は、二〇五番歌の左注か。しかし、古歌と二〇五番歌の内容にも整合性がないように思われ、古歌の内容に対応した歌が脱落した可能性も考えられる。ここでは試みに、桜に執着した女が蛇に生まれ変わることや夢に女が現れることなど、世の中にはめつたにないことが多く起こっていることを詠んだとして解釈してみた。

他本の詞書によれば、月のさわぐ様子が詠まれた歌となる。天の川を七夕と結びつけずに「天河水まさるらし夏の夜は流るる月のよどむまもなし（後撰・夏・二一〇 よみ人も）」などのように、天空の情景を詠んだ歌と解される。つまり、月が天の川を流れるように見える情景を「めづらしきこと」と詠んだものか。

二〇七番歌

人の草子書かせし奥に

我よりは久しかるべき跡なれど忍ばぬ人はあはれとも見じ

〔異同〕 か、せし↓か、する（前）・か、せける（歌・西）・なか↓あと

（歌・西・前）

〔他出〕 なし

〔語釈〕 ○草子 紙を冊子状に綴じたもの全般を指すが、このように奥に和歌を書きつけたものは歌集である場合が多い。〔補説〕参照。○奥草子の奥書。○跡 底本「なか」を、他本により草子に書き付けた歌としてふさわしい「あと（筆跡）」に改めた。ここでは和歌を指すか。〔補説〕参照。

〔通釈〕 人が草子を書かせたその奥書に

私よりは長く残るはずの私の和歌だが、私を偲んでくれない人は趣深く見てはくれませう。

〔補説〕 当該歌に良く似た歌として

人の草子書かせ侍りける奥に書きつけ侍りける
書きつくる心見えなる跡なれど見てもしのばむ人やあるとて

（拾遺・雑賀・二二〇〇 よみ人知らず）

がある。これもとるに足りぬ自分のことを「跡」によって偲んで欲しいと願っている。

〔跡〕は基本的に筆跡を指すことが多いが、当該歌では書かれた和歌を指し、自分の歌を書いた草子が、せめて知己が自分を偲ぶ縁となつて欲しいという歌人中務の願いを添えたものと見たい。

二〇八・二〇九番歌

山吹植多をきて見えぬを、女のさぞ待ち顔なるを見て、景明の
言ひける

見にも来ぬ人待つ宿の山吹は風吹く枝に露ぞ置きける

返し

枝たわみ重きことをや思ふらんおきてゐるべき花の上の露

〔異同〕 さら↓さそ（御）、見にもこぬ↓□にもこぬ（御）、人□つや□の↓人まつやとの（御）、おもき□と↓おもきこと（御）（底本・御所本のみの所収歌）

〔他出〕 なし

〔語釈〕 ○景明 源景明。源兼光男。○さぞ待ち顔 底本「さら」では意味が通らない。そのためか、御所本では「さぞ」としている。ここではそれを参考に校訂し「いかにも待っている様子」の意に解した。○返

し 一緒に絵を見ていた中務の返歌。○重きことをや思ふらん 山吹の花が露の重みに耐えかねて枝を撓ませる様と、頭を垂れて悩む様を重ね合わせている。○おきてゐる 露が「置く」と、女が「起きて居る」を掛ける。「おとにのみきくの白露夜はおきて昼は思ひにかへずけぬべし（古今・恋・一四七〇 素性法師）」。○花の上の露 恋人を待ちわびる女の涙の喩。また、はかない身の上を重ね合わせる。「いつとなくさのみ露けき花のうへをなにかは風にしらせしもせん（和泉式部・七五七）」。

〔通釈〕 山吹を植えておいて訪れない男を、女がいかに待ち暮らしている様子なのを見て、景明が詠んだ歌

見にも来ぬ恋人を待つ宿の山吹には、風が吹き付ける枝にもかかわらず、悲しみの涙を思わせる露が置いている。

返し

枝が撓むほど重く思い悩んでいるのだろうか。花の上に露が置いているように女は涙を浮かべて、起きて待っているだろう。

二一〇番歌

方違へに行きたる家主、他へ行きたる折にて、居らねば、
桜花面白き下に、車ながら夜明かして、結びつけて帰る

恋しくはいかにせよとてかつ散りてあだなる花の下に寝ぬらん

〔異同〕 なし（底本・御所本のみの所収歌）

〔語釈〕 ○方違へ 外出する際、前夜に吉方の家に泊まり、そこから
目的地に向かうこと。○かつ散りて ここでは、「散る」を「離散する」
の意と見て、家主があちこち出歩くことを指すと解したい。○車なが
ら 車に乗ったままで。

〔通釈〕 方違えに行つた家の主人が外出した折で、不在だったので、桜
の花が趣深く咲いている下で車に乗つたまま夜を明かして、桜
の枝に結び付けて帰つた。

恋しかつたら私にどうせよといって、あなたはすぐに余所へ行つて
は仮初めの花の下で寝てしまうのでしょうか。

〔補説〕 桜の下で夜を明かした自分の体験を、「家主」の状況にすり替
えて詠み、会えなかつた残念さを洒脱に表現している。

二一一番歌

ものへ行きし人に、扇取らすとて

君が行く船路にそふる扇には心かなふ風も吹かなん

〔異同〕 いきし人↓いくひと（西・前）まかる人（歌）、とらすとて↓

やるとて（西・歌・前）、ふなちに↓ふなちか（西）、風も↓かせそ（西・
歌・前）ふかなん↓ふきける（西・歌・前）

〔他出〕 新千載・離別・七四四

〔語釈〕 ○ものへ行きし 地方へ下る場合や寺社参詣に赴く際などによ
く使用する表現。ここでは歌に「君がゆく船路」とあるので、下向の際
の歌であろう。○扇取らすとて 扇を贈ろうとして、の意。「あふ」の
名をもつことから、再会を期して餞別の品として贈られる。「旅にまか
りける人に扇つかはすとて／添へてやる扇の風し心あらば我が思ふ人の
手をな離れそ（後撰・離別羈旅・一三三〇 よみ人知らず）。○心にか
なふ 心に思う通りになる。意に添う意。「命だに心かなふ物ならば
何か別れのかなしからまし（古今・離別・三八七 しろめ）。当該歌で
は、船が順調に進んで欲しいと思うあなたの心に適う、の意。○風 風
は扇・船の縁語。「身にかかる扇の風をそふるかな船路をゆかん君がた
めとて（中務（西本願寺本）・一〇三二）」。

二一二番歌

同じさまなる人に、枕やるとて

別るらん人の心はこれをさへあだなる草の枕と思ふな

〔異同〕 詞書↓おなしさまなる人にさくらやるとて（御）ものへ行人に
まくらとらすとて（歌）

〔他出〕 なし

〔語釈〕 ○同じさまなる人 前歌を踏まえて、同じようにある所へ下向する人をいう。○枕やる 餞別として枕を贈ること。ただし、類例は多くは見られない。「ものへいく人に、枕箱とらすとて／忘らるな浦島の子が玉くしげあけてうらみんかひはなくとも（和泉・七八七）。○別るらん人の心 「らん」は婉曲。別れていく人の心。他例の少ない表現。○あだなる草の枕 「あだ」は自然の景物に対する「はかなさ」の意。「草の枕」は「草を結んだ枕」という枕としての実体を示す場合や、旅や旅寝そのものを意味することも多い。当該歌では実体を示し、草の枕はいずれ枯れるこという。また、「あだ」に人事にまつわる「不誠実」の意を響かせて、自分が贈る枕は、枯れる草の枕とは違って心を籠めた枕であるという意を含む。

〔通釈〕 同じ様子のの人に枕を贈るということで

別れてゆくあなたは、この枕までもはかなく枯れる草の枕と同様に
思わないで欲しい。あなたを思う私の心がこもった枕なのだから。

二二三番歌

越路へ行きし人に

白山に雪降りしきて寒くとも絶えず扇の風を忘るな

〔異同〕 詞書↓こしへゆく人に（前・歌）、しら山に↓こしやまに（前）
ふりしきて↓ふりつみて（前）、たえず↓かならず（前）
〔他出〕 なし

〔語釈〕 ○越路 「越の国への路」の意と「越の国の地」の意がある。

当該歌では前者。「越の国」は、古代には現在の北陸から北海道までの

日本海方面の地方を指したが、その後、越前・越中・越後の三国を指すようになった。北陸の風土性から、雪深い地、春の到来が遅い地とされており。雪が詠み込まれることが多い。○白山 加賀白山。最高峰の御前峰をはじめいくつかの峰々を合わせた総称で、石川・富山・岐阜・福井の四県にまたがる。「白山」の名は万年雪を頂き四季を通じて山容が白く遠望されることに由来するという。「消えはつる時しなれば越路なる白山の名は雪にぞありける（古今・羈旅・四一四 躬恒）。○雪降りしきて 雪が一面に降り敷いて、の意。「わが宿は雪ふりしきて道もなしふみわけてとふ人しなれば（古今・冬・三二二 よみ人しらず）。○扇の風 詞書には記されていないが、餞別として扇を贈ったか。

〔通釈〕 越路に行った人に

白山に雪が一面降り敷いて寒くても、いつも餞別に贈った扇を忘れないで欲しい。

二二四・二二五・二二六番歌

順朝臣の能登守にて下りしに

冬ふかく春とも知らぬ越路には折りし梅こそ花咲きにけれ

返し
梅の花色は雪にもまがふめりかへる山まで君はとはなん

又やりし

いつはたと待つほど過ぎば白山の雪間のあとをたづねざらめや

〔異同〕（※前田家本は二一六番歌を収載せず）順朝臣の↓したがふ（前）、能登守にて↓能登守になりて（前）、下しに↓くたるに（西・前・歌）、冬ふかく↓ゆきふかく（西・前）雪ふかき（歌）、しらぬ↓みえぬ（西・前）、こしちには↓こしちにも（西・歌）こしちにほも（前）、をりしむめこそ↓をりしむめは（前）、花さきにけれ↓花は咲けれ（歌）、返し↓返事（西・前）、まかふめり↓かよふめり（西・前）かよふなり（歌）、かへる山まで↓かへるやとまで（西）かへるやま（前）かへる山して（歌）、きみは↓人は（西）、又やりし↓またかへし（西）かへし（歌）、すきは↓すきし（西）、しらやまの↓しらやまに（西）、ゆきまの↓ゆきとの（西）、たつねざらめや↓たつねをらめや（西）

〔他出〕 夫木・春三・六四七（二一四）、続後拾遺・離別・五四八（二一六）
〔語釈〕 ○順朝臣の能登守にて… 源順が能登守に任ぜられたのは天元三年（九八〇）正月二十九日、または天元二年正月とする両説がある。

○冬ふかく「春とも知らぬ越路…」と続き、春を迎えた後の歌であるので、底本「冬ふかく」の本文よりも「雪ふかく」の方が歌意は通るが、底本に従った。○越路 北陸道。二二三番歌既出。○まがふめり 梅の花と手折った枝にかかった雪とを見間違える、という発想。「梅の花をりしだがへば足曳の山路の雪のおもほゆるかな（貫之・一二六）」○かへる山 帰山。越前国の歌枕。「都へ」帰る」の意を掛ける。○いつはた「五幡（越前国の歌枕）」と「何時はた」を掛けた表現。○白山 二二三番歌既出。多く雪の景とともに詠まれる。○雪間 降り積もった雪の間。「東路ののちの雪間をわけてきてあはれ都の花を見るかな（拾遺・雑春・一〇四九 藤原長能)」。

〔通釈〕 順朝臣が能登守として下ったときに

冬が深く、春が来たともわからない越路では、手折った梅にこそ花が咲いていることですね。

返し

梅の花の色は雪にも見紛うようです。都に帰るまでに、あなたは帰山まで私をたづねて来てほしい。

また送った歌

何時またお会いできるでしょうと、待つ月日が長く過ぎたとして、白山の雪間のあなたが行った道をたづねないことがあるでしょうか。

〔補説〕 能登守として赴任した順のもとへ中務が梅の花を贈ったと推測し得る二一四・二一五の贈答である。越の地の帰山を歌った順の返歌（二一五）を受けてさらに中務は、五幡や白山といった越路の歌枕を詠み込んだ歌を送った。「帰山」と「五幡」とを詠んだ歌の贈答に『後撰集』の次の歌がある。

あひしりて侍りける人の、あからさまにこしの国へまかりけるに、ぬさ心ざすとて よみ人しらす

我をのみ思ひつるがの越ならばかへるの山はまどはざらまし
返し

君をのみいつはたと思ひこしなればゆききの道ははるけからじを

（離別鞆旅・一三三五・一三三二六）

また『伊勢集』には「忘れてはよにこじものをかへる山いつはた人にあはむとすらん（四一一）」がある。

『後撰集』に「しら山に雪ふりぬればあとたえて今はこしぢに人もか

よはず(冬・四七〇 女)があるが、中務の二一六番歌はこれとは異なり、再会を長く待つことになったとしたら雪の間を分け入って順のものとをたずねよう、と歌った。『女流歌人中務』中務年表によれば、このとき中務六十九歳。順七十歳(天元三年赴任とした場合)。親しく交友を結んできた二人の明るく機知に富んだやりとりである。この三年後に能登の地で順は没した。

二一七番歌

豊後守の妻上りたる、筑後守の妻下るに、やらんとて
請ひしに

別れゆく君がたむけを祈るにぞ来にし道にも行く心かな

〔異同〕 詞書↓豊後守にてくたりたる人の又筑後にてくたりけるにやる(西) ふこのかみのめにてくたりしひと又ちこへゆくにやるおなしやうにて(前) ふこのかみのめにてくたれる人のまたちここのにてゆくにやる(歌)、たむけをいのるにぞ↓たもとをいのりにと(西・前) たむけをいのりにと(歌)、きにし↓き、し(前) きこし(歌)、みちにも↓みちへも(西)

〔他出〕 なし

〔語釈〕 ○豊後守、筑後守 ともに具体的には未詳。○たむけを祈る ことはたむけの神にあなたの無事を祈るの意か。〔補説〕 参照。○祈るにぞ 「ぞ」の結びは流れ。他本すべて「祈りにと」。或いは誤写か。

〔通釈〕 豊後守の妻が上京して、筑後守の妻が下る時に贈ると言つて求めた時に

別れてゆくあなたの無事を手向けの神に祈るといふことで、やって来た筑紫の道にも再び行く私の心ですよ。

〔補説〕 詞書では、誰が誰に贈るのか、本により異なる。底本では、「豊後守の妻」が任果てた夫とともに上京し、その友人か誰かが「筑後守の妻」として下向することになったので、饒別の歌を中務に代作してもらったと解釈される。西本願寺本では、豊後守の任を終えた人が再び筑後の守として下ることになったから、中務がその人に贈った歌とする。前田本は「豊後守の妻にて下りし人、又筑後へ行くにやる」、歌仙本もほぼ同文で、この二本では豊後から上京した人が再び筑後へ下り、中務がその人に贈ったという点で西本願寺本と一致するが、守その人ではなくて妻のことになる点では底本と同じになる。

歌も解りにくいところが多い。底本上の句では「君がたむけを祈る」とあるが、歌仙本に「君がたむけの祈りにと」とあるので、歌の贈り手(或いは中務)が相手の無事を祈ることであろう。「君がたもとを祈りにと」(西・前)ならば、饒別に衣を贈る際に歌を添えたことも想像される。下の句では、「来にし」や「行く」の主語も問題になる。底本では、豊後守の妻が、自分がやって来た道を思い、その同じ筑紫への道を、私の心は筑後守の妻に付き添って行くよ、との意になる。しかし他本では、豊後守(又はその妻)と筑後守(又はその妻)とが同一人物であるから、「来にし」「聞きし」「行く」等の主語はみな中務と考えるべきであろうか。ここは底本どおりに解釈した。

二一八番歌

同じ人に扇やるとて

手にかくる扇の風を添ふるかな船路を行かん君がためとて

〔通釈〕 同じ人に扇を贈るということで

手に持つ扇の風を添えることですよ。船路を行くだらうあなたのためということ。

二一九番歌

美濃国なる人のもとへ文遣るとて、奥に

音に聞く人をあやなく思ふ身は山路を越ゆるあとと知らなん

〔通釈〕 美濃国にいる人のもとへ手紙を送るということで、その奥に

風の便りに消息を聞くあなたを大変心配して、はるばる山路を越えるような思いで書き送る私の筆跡と知ってほしい。

二二〇番歌

尼になりて吉野に住む人に、京より

吉野山思ひしやればよそながら聞きたる人の袖ぞ濡れける

〔異同〕 なし（底本・御所本のみ所収歌）

〔他出〕 なし

〔語釈〕 ○尼になりて吉野に住む人 未詳。○聞きたる人 底本「ゆきたる人」。歌意から校訂。「補説」参照。

〔通釈〕 尼になって吉野に住む人に、京から

吉野山に住むあなたに思いをはせると、遠く離れた都にいても話を聞いた私の袖が濡れることです。

〔補説〕 底本第四句は「ゆきたる人の」。相手が山の寂しい生活で袖を濡らすさまを想像して歌ったとも考えられなくもない。しかし、その場合、結句は「袖ぞ濡るらむ」等とありたいところで、また上の句と主語が変わる。この歌は贈った中務の袖が濡れると考えるほうが自然だろう。

二二一番歌

初瀬にまかりて帰るさにいつはより下るに

川舟に思ふどちして行くほどは鴛鴦のともみの心地こそすれ

〔異同〕 ほどは↓ほどに（御）（底本・御所本のみ所収歌）

〔他出〕 なし

〔語釈〕 ○初瀬 大和国の歌枕。長谷寺があることで知られ、平安時代には初瀬で長谷寺を指すことが多い。現世利益を求める多くの参拝者を集め、平安朝の文学にも散見する。○いつは 地名と思われるが未詳。伝写過程における誤脱の可能性も。私見は「補説」。○思ふどち 「親しい者同士」の意。○鴛鴦 雌雄常に仲睦まじい姿がよく詠まれる。○ともみ 「共に居る」の意か。他例が見出し難いが、「共寝」の例は確認できず。

〔通釈〕 初瀬詣をして帰る際に、いつはより下る時

川舟に、親しい者同士が乗り合わせて行く時は、まるで鴛鴦が雌雄共に居るような心地がすることだよ。

〔補説〕 通釈は底本詞書の「いつは」のまま呈したが、誤写の可能性も

指摘しておきたい。

当該歌の内容から察するに、詞書には川に関する地名が記された可能性が高い。初瀬詣に関連する川はいくつかあるが、ここでは泉川が適当か。その場合、「つ」と「は」の間にあった「みか」の文字が、伝写過程で脱落したことになる。

例えば『源氏物語』宿木巻において、初瀬詣の途次、浮舟の女房が「泉川の舟渡りも、まことに、今日は、いと恐ろしくこそありつれ」と語った件などから分かるように、初瀬詣の際には泉川を渡る。私家集にも、以下のような例がある。

姫宮うせ給ひてまたの年、大納言、初瀬に参り給ひて、泉川のもとにて、

見るごとに袖こそ濡るれ泉川憂きこと聞きしわたりと思へば

（定頼・一一四）

二二三番歌

薄の招けば、娘の君

招く尾花を泊とはせん

法師

追ふ風に漕ぎ行く舟をほにあげて

〔異同〕 なし（底本・御所本のみ所収歌）

〔他出〕 なし

〔本文校訂〕 上の句に「ほねあげて」とあるが、このままでは解釈が困

難である。誤写と判断して「ほにあげて」と校訂した。

〔語釈〕 ○娘の君・法師 娘の君は、中務の娘・井殿。法師は井殿の腹違いの兄弟にあたる人物か（『女流歌人中務』）。木船注釈では、伊尹男・行源かとする。当該歌は、井殿が下の句を詠みかけ、法師が上の句をつけている。○招く尾花 花の形が獣の尾に似ることから、薄を「尾花」という。薄のそよぐ様を、手招きの仕種に見立てる例は多い。○追ふ風に漕ぎ行く舟を「ほにあげて」を引き出す序詞的な役割。下の句の「泊」を受けた表現。「を」は「の」であってほしいところだが、ひとまず底本のまま。○ほにあげて「高々と」の意。また、「ほ」には舟の「帆」と薄の「穂」を掛ける。「見渡せば浪とぞ見ゆる秋の野にほにあげて舟や漕ぎ渡るらん（保憲女・八五）」。

〔通釈〕 薄が手招きするようにそよぐのを見て、娘の君が

手招きしている薄のもとを舟泊としましょう。

法師が

追い風に吹かれて漕ぎ行く舟の帆のように、高々と穂をひるがえして

二二三番歌

雪を雁の子に作りて

雁の子も年とともにやかへるらん雪をふる巢にかひの見ゆるは

〔通釈〕 雪で雁の卵を形作って、

雪を古巢として見ると見えるあの雁の卵も、年が改まるとともに孵るだろうか。

二二四番歌

忍草の廂にあるを。井殿は娘の君。

涙のみふる家に生ふる忍草眺むる空の目にさはりつつ、

〔異同〕 なし（底本・御所本のみの所収歌）

〔他出〕 なし

〔語釈〕 ○井殿 二二三番歌既出。○涙のみふる家 「涙が降る」に「古家」を掛ける。○忍草 ノキシノブのこと。軒に生える植物として詠まれることが多く、荒廃した宿のイメージをもたらず。また、「ひとりのみ眺めふる家のつまなれば人をしのぶの草ぞ生ひける（古今・恋五・七六九貞登）」のように、人を恋しく思う意でもよく詠まれる。当該歌は、この古今集歌の影響を受けた詠か。○空 天空の「空」に、「うわの空」の意を掛ける。

〔通釈〕 忍草が軒に生えているのを。井殿は、中務の娘の君である。

涙ばかり流している私の、この古家に生えている忍草は、物思いにふけるうわの空の目に何度も何度も映っては、あの人を忍ぶ心と呼び起こすことだよ。

〔補説〕 木船注釈では、当該歌は井殿が伊尹に捨てられた際の作と推測されている。詞書から詠歌状況を察することはできないが、忍草が多く恋愛歌に詠まれていることや、「語釈」に挙げた古今集歌との発想的類似から考えると、この推測は首肯できる。

底本一四七・一四八番歌には、伊尹と中務の以下の贈答がある。

御屏風の歌、内裏に詠みて奉りしを見給て、右大将

吉野山瀧の糸さへとちたれど早く知りにし声は忘れず

返し

岩浪は高かりしかど吉野山通はで凍る冬ぞへにける

本注釈（「中務集注釈（二）」）では、この箇所は補注として、

夫婦である伊尹と井殿の間に何かしらの不和があり、関係が途切れているところに、中務の若宮御裳着屏風歌をきっかけとして伊尹がご機嫌伺いの歌を詠み、井殿の立場で中務が返歌を代作したか、などと想像される。

と記した。また、当該歌に続く二二五、二二六番歌も、伊尹と井殿の関係が切れた後の歌で、二人にはたびたび不和な時期があったと思われる。当該歌もそのような状況下で詠まれたものではないだろうか。

二二五・二二六番歌

一条の大臣たえ給ひて、花を、大臣殿

君待ちし昔かとこそ思ほゆれ宿の前なる梅のにはひに

母君聞きて

花の香のつまにかはらぬ折ごとに宿をかれにし君をしぞ思ふ

〔通釈〕 一条の大臣（伊尹）が、お通いにならなくなって、花を、大臣殿へ（送った時に井殿が詠んだ歌）

あなたの訪れを待っていた昔かと思われたことです。家の前にある

梅の香りによって。

母君（中務）が聞いて

花の香が軒先で昔と変わらず匂う折ごとに、この宿を離れていった

あなたさまのことばかり思っております。

二二七・二二八・二二九番歌

麗景殿の宮の君これより帰り給へる朝に、山吹に挿して、法師

言はぬ色を思ひけらしな山吹の君帰りての今朝の露けさ

返し

玉水の底の影のみ恋しくて帰る空なき山吹の花

まだ、帰らでゐたりし程、花見に端に出て、

君が来て花見る程の月なれや我有明の入り難きかな

〔異同〕 た□へる↓たまへる（御）、月なりや↓月なれや（御）、い□□

たきかな↓いりかたきかな（御）（底本・御所本のみ所収歌）

〔他出〕 なし

〔語釈〕 ○麗景殿 村上天皇女御莊子女王（山口博『王朝歌壇の研究 冷泉村上田融朝篇』桜楓社一九六七）とする説と、尊子内親王（木船注釈・『女流歌人中務』）とする説がある。○宮の君 女房名。宮家の出自が推測される。○法師 二二二番歌既出。二九四番歌詞書で「宮の君」と結婚していたと推測される。○言はぬ色 山吹は「くちなし色」からの連想で物言わぬ様の喩として詠まれる。「山吹の花色衣ぬしやたれとへどこたへずくちなしにして（古今・雑体・一〇二二 素性）。○玉水

「軒の玉水」の形で水滴を指す場合が多い。贈歌の「露けさ」に導かれた語であろうが、当該歌では「底の影」とあることから、「玉」は美称

で「清らかな水」の意。「山城の井出の玉水手にくみてたのめしかひもなきよなりけり（『伊勢物語』一二二段）」の「井出」の地名も山吹を連想させる。○底の影 水面に映った影。恋しい人の姿が映るとして詠んだものか。○帰る空なき 帰る気がしない。ここでは、「玉水の底」との対として「空」を詠みこんでいる。○君が来て 底本「きみがきく」では意味が通らない。「く」と「て」の字形類似から「来て」と校訂した。○月なれや 底本では「月なりや」であるが解釈が困難である。御所本は「なれや」としており、これに従って校訂した。○我有明の入り難きかな 邸内に入らずにいる様を有明の月に喩える。「秋の夜の月みにいでて夜はふけぬ我もありあけのいらであかさむ（高遠・一一三）」。

〔通釈〕 麗景殿の宮の君がこちらからお帰りになる朝に、山吹に挿して、法師

口には出せない物思いをしているようだ。山吹の花のあなたが帰った朝の露に濡れている様子は。

返し

清らかな水に映ったあなたの姿ばかりが恋しくて帰る気のしなくなるほど露に濡れた山吹の花であることよ。

まだ、帰らないでいる内に、花を見に端に出て
あなたが来て花を見る折の月だからだろうか。私は有明の月のよう
に家の中に入りがたいことだ。

〔補説〕 法師と宮中から退出してきた麗景殿の宮の君との贈答歌である。底本二九四番歌詞書にも「麗景殿の宮の君、法師の妻にめれ」と、宮の君が法師と結婚関係にあっただろうことが記される。「宮の君」という呼称から、皇族でありながら後見を失うなどして出仕せざるを得ない身の上と推測される。退出時には中務邸の法師を訪れ、そこから出仕

先に帰るといふ婚姻形態をとっていたらしい。

配列から考えて、二二九番歌も法師と宮の君の贈答であり、「入り難し」と詠むのは、出仕先に帰る宮の君を見送る法師の側と思われる。贈答の技巧性から、『女流歌人中務』は別れを真に悲しむというよりは、後朝に仮託して風流を楽しむ二人の円熟した関係がうかがえるとする。

二二〇・二二二番歌

侍従わかしうい行いきて物語ものがたりなどして刀かたなを落おとしてきたるに本院の侍従わかしういおこせたる

すばる出いでて明けぬべくとも身にそへる刀かたなをしもや落おとしおをくべき返し。この女君こそはしけめ、をおとこなりしかば。

たびたびくにすばるながらも抜ぬけたればつまがたなにやせせまほしき君きみ「異同」なし(底本・御所本のみ所収歌)

「他出」なし

「語釈」○侍従 底本・御所本「女侍従」とするが、刀を落としたのは男性とみられるので不審。「女」は誤って混入した可能性があると考え、校訂した。藤原伊尹か。「補説」参照。○物語 底本「も」は虫損。御所本により補う。○刀 太刀の短いもの。「あけぬともたたとぞ思ふ唐錦君が心し刀ならずは(伊勢・四七七)」の歌もあり、「刀」の語からは、夜が明けて立つ(立って帰る)、といった状況も連想される。○本院の侍従 朱雀天后后本院女御慶子、村上天皇中宮安子、同天皇女御徽子女王等に仕えた本院侍従か。「補説」参照。○すばる 昴星。「和名類

聚抄」に「昴星 宿耀經云昴昴宿御御八流八流六星火神也」とある。「星は、すばる。ひこぼし。夕づつ。(『枕草子』)」○この女君 刀を落とした侍従の妻。中務の娘の井殿をさすか。「補説」参照。○をとこ 夫。○すばるながらも 一つにまとまる意の「すばる」と昴星とを掛ける。○つまがたな「夫の刀」の意か。○せまほしき 底本・御所本「せましき」。「ほ」の脱落とみて校訂した。

「通釈」侍従が行って語らいなどして、刀を落としてきたところに、本院の侍従が送り届けた際の歌

昴が出て夜が明けてしまいうになり、立って帰るといっても、身につけているその刀を落としておいて良いものでしょうか。良いわけがありません。

返しの歌。この女君がしたのであるう、夫であったので。たびたび、一つにまとまるといっても抜けてしまうので、あなたもこの刀を、自分の夫の刀ということにして置いておきたいのではないでしようか。

「補説」『本院侍従集』『一条撰政御集』等により本院侍従と藤原伊尹との交渉が知られる。井殿はこの伊尹の妻であることから、二二〇番歌で刀を落としたという侍従が伊尹であるとすれば、二二二の返歌は井殿によるものかと推測される。なお、伊尹の侍従在任時期は天慶五(九四二)年～同九(九四六)年(『公卿補任』)。

二二二・二二三番歌

孫むまごの少将中、扇あふぎに書かく

恋こひしくも思おもほゆるかな宮城野みやぎのの小萩こはぎがもとのたおもよと思おもへば

これを見給ひて、一条殿にや

恋しくはうちとけねかし宮城野の小萩もたわに置ける白露

〔異同〕 なし(底本・御所本のみ所収歌)

〔他出〕 なし

〔語釈〕 ○孫の少将 藤原光昭。一条摂政伊尹の四男。母は中務女の井殿。底本では「中将」と記載されているが、光昭は貞元二(九七七)年十月二三日左近少将在任で中将の記録はない。この後の二三四番歌詞書に「同じ少将」と書かれているほか、家集中では当該歌以外すべて光昭についての官名は「少将」と記されている。そのため、「中将」は「少将」の誤写と考えて校訂した。○宮城野 陸奥国の歌枕。宮城郡の野。現在の宮城県仙台市東部に地名が残る。「小萩」「露」などの語にかかる場合が多い。○小萩 小さな萩。『源氏物語』で桐壺帝が詠んだ「宮城野の露吹きむすぶ風の音に小萩がもとを思ひこそやれ(桐壺卷・二)」のように「小萩」を幼い子の喩えとして用いる場合もある。当該歌では「うちはへていやはねらるる宮城野の小萩の下葉色にいでしより(惟成弁・一四)」のように、小萩は女性を暗喩している。○たよりと思へば「たより」は「つて」、「手立て」。「身はとめつ心はおくる山桜風のたよりに思ひおこせよ(新古今・雑上・一四七二 安法法師)」○一条殿 藤原伊尹(二二五番歌既出)。○うちとけねかし 心の隔たりがなくなる意の「うち解く」と、露などが溶ける意の「うち溶く」の掛詞。「とく」と「露」は縁語。「今ははやうちとけぬべき白露の心置くまで夜をや経にける(後撰・秋中・二八四 大輔)」。「ね」は強意の助動詞「ぬ」の命令形。「かし」は念を押す意の終助詞。○たわに「たわわ」と同じ。

たわむ程に。底本「たは」と見える。本文二字目「は」が「ま」にも読めるため、傍記で「は」と明記されたと解した。○白露 当該歌では小萩を女性、白露は女性の涙に喩えられている。

〔通釈〕 孫の少将が扇に書いた歌

慕わしく思われることよ。あの宮城野の小萩が待っている風を起す手立ての扇と思うと。そのように、あなたに逢う手だての扇だと思うので。

これをご覧になって、一条殿であろうか。

慕わしく思うのならば、いっそううちとけなさい。宮城野の小萩がたわむ程に置いた白露よ。そのように、涙に濡れているあなたもうち解けなさいよ。

〔補説〕 二二三番歌は、次の『古今集』の歌を踏まえたものと考えられる。

題しらず

宮城野の本荒の小萩露を重み風を待つごと君をこそまて

(恋四・六九四 よみ人しらず)

この歌は、女の立場で「宮城野の小萩が、葉に置いている露が重たいので、その露を払う風を待っているように、私はあなたを待っています」と男を待つ思いを詠んでいる。

二二三番歌では、女性に仮託して歌の中には「扇」や「風」という言葉を用いずに、詠歌事情と『古今集』歌を踏まえることで、扇が送る風(男)を慕わしく思う女性の心を詠んでいる。また、扇は「あふ」の語を含んでいるため、「あなたに逢う手だての扇」というように「逢う」意を響かせて解釈した。

また二二三番歌は、「恋しくはとけてをむすべ宮城野の小萩もたわに結ぶ白露(元輔・二〇九)」と内容が非常に近く、影響があると考えら

れるが、前後関係は定かでない。

二三四番歌

同じ少将、内裏にて人の局の前を渡るに、毬栗のゑみたるを差し出でたるを取りて、みづからより優れるにや、母君にいそぎ
いかならんと思ひし物を嬉しくもちゑみにける顔を見るかな

〔異同〕 なし（底本・御所本のみ所収歌）

〔他出〕 なし

〔語釈〕 ○同じ少将 藤原光昭（二二三番歌既出）。○毬栗 毬に入つたままの栗の実。「ゑむ」は、美が熟して毬が割れていることを笑うのにたとえていったもの。○みづからより優れるにや 「みづからよりはまさりたる人に忍びて通ひたりしかば、この度ばかりと、女の言ひおこせて侍りしかば／さきにたつ涙の道に誘はれて限りの旅に思ひたつかない。しかしここでは、その後母君に歌の代作を頼んでいることから、兼澄・三三〇のように、身分が自分よりも上であることをいう例が多い。しかしここでは、その後母君に歌の代作を頼んでいることから、木船注釈と同じく「自分よりも歌が優れた人」と解釈した。○母君にいそぎ 光昭の母は井殿（二〇二番歌既出）。母の井殿に急いで代作を頼んだことをいう。○いかならん 「いか」に栗の「毬」を掛けて、「機嫌はいかがだろうか」の意と「毬のままなのだろうか」の意を掛けている。
〔通釈〕 同じ少将が、内裏で人の局の前を渡る時に、毬栗の、熟して毬が開いたものを差し出してきたのを取って、自分よりも歌が優れた人であったのだろうか、母君のところへ急いで代作を頼んで
棘がついたままの毬ではないが、ご機嫌はいかがだろうか、悪いの

だろうかと思っていたところ、嬉しいことに、実が熟して毬が開いたように、微笑んだお顔を見たことですよ。

〔補説〕 当該歌のように、歌に秀でている母親が息子の代作をした例は、他の家集にも見られる。

傅の殿、初めて女のがりやりたまふに代はりて
今日ぞとやつらく待ち見むわが恋は始めもなきがこなたなるべし
（道綱母・一五）

七月七日、めにやらんと拳周が言ひしに代はりて

うらやまし今日を待ち出て七夕のいかなる心地してくらすらむ
（赤染・二二）

中務の孫光昭が母・井殿に代作を頼んだ歌や、二二三・二二三番歌の伊尹・光昭父子の贈答など、中務周辺の人々の歌が、中務の家集に収載されていることは、一つの特徴として興味深い。

二三五番歌

孫の大納言君、二相如通ひしを、一所にて見苦しければ、来たるを返すがいとゆゆしければ、祖母君

里も無くしるべも見えぬ山道のこのほどこいで人宿るらん

〔異同〕 なし（底本・御所本のみ所収歌）

〔他出〕 相如・五三（作者・相如）

〔語釈〕 ○孫の大納言君 中務の娘・井殿と藤原伊尹との間の娘。○こ相如 権中納言敦忠の孫、藤原相如。「こ」は或いは「に」（二二）か。底本には「二」を字母とする「に」の使用が他に見当たらず、同形の文

字が「こ」であるため、ひとまず「こ」と読んで「故」の意と解する。「に」ならば「孫の大納言君に、相如通ひしを」となって意味が通りやすい。○一所にて見苦しければ 祖母も一緒の家で手狭な所であったから、の意か。○返すがゆゆしければ「ゆゆし」は甚だしく気の毒だ、の意か。○祖母君 中務をさす。○しるべ 道案内、手引き。「あまのすむ里のしるべにあらなくに怨みむとのみ人のいふらむ(古今・恋四・七二七 小野小町)」。○いかで人宿るらん どのようにしてあなたは宿るのでしようか。ここは、心配する気持ちの表現。「補説」参照。

〔通釈〕 孫の大納言君に故相如が夫として通ったが、同じ家で手狭で見苦しいということで、訪ねて来たのを帰らせるのがひどく気の毒なので、祖母君

人里も無く道案内も見受けられない山道のこのあたりで、どのようにしてあなたは宿を取るのでしょうか。お気の毒なことです。

〔補説〕 この歌は『相如集』にも見えるが、詞書にも歌にも異同がある。

同じ人、びんなき所にきたりしに

里もなくしるべだになき山道にこのもといかで人宿るらむ

(相如・五三三)

底本では次の二三六番歌が、『相如集』側では五二番歌として当該歌の前に置かれているため、大納言君を「同じ人」と表現する。こちらの詞書では、「便なき所に來たりし」の主語も、歌の作者も、相如とも大納言君とも解釈できる。『中務集』と合わせて考えた場合は、どちらも大納言君と見るほうがふさわしいが、その場合には『相如集』は相如の歌ではなくて大納言君(又は中務)の歌だけ載せたことになる。木船注釈では「相如自身がぐちをこぼした歌」とするが、そう簡単には片づけ難い。『相如集』の配列からは、底本二三六番歌(相如の歌)への直

接的な返歌ではないまでも、同じ時期の相手側の歌として当該歌を記載したと考えることも可能になるからである。夫婦仲が悪化している時の歌であることは確かであろうが、作者問題と歌の真意については悩ましい。ここでは中務が相如を案じ苦しめる気持ちの歌と見た。

二三六・二三七番歌

相如と恨みかはして逢はぬ頃、男

数ならぬ身をうき舟は寄る辺なみ響の灘のなぐをこそ待て

返し、法師

なぐ間なく響のなだはあなれどもやがて通はぬ舟は聞こえず

〔異同〕 うらみかはして↓うちみかはして(御)(底本・御所本のみの所収歌)

〔他出〕 相如・五二、夫木・一二〇六五

〔語釈〕 ○うらみかはして 底本では「うちみ」とも読めるが、字形から「うらみ」を取った。互いに恨み事を言い合って。○うき舟 「うき」は「浮き」と「憂き」とを掛ける。○響の灘 播磨国の歌枕。波が激しい難所として詠まれた。ここでは相如に厳しい態度を取る大納言君を響の灘に喩えている。○なぐ 風や波が穏やかになる。機嫌が良くなることの喩え。「風吹かでなきたる浦と聞くからによそなるかたも潮のみぞみつ(清慎公・二九)」。○法師 二二二番歌既出。○響のなだはあなれども 底本「ひ、きのなけはあるれども」。「なけ」を「無げ」と見ても、「あるれども」はこのままでは解釈出来ないため校訂した。○やがて通

はぬ舟は聞こえず「聞こゆ」は噂などを聞く。ここは、そのまま通わない舟があるとは話に聞かない、波風が荒い響の灘にも舟が通うように二人の仲が絶えることはない、との意であろう。

〔通釈〕 相如と互いに恨み事を言い合って逢わない頃、男から

物の数ではない我が身をたらく思う浮舟のような私は、寄る辺がなくてあなたの許へ行くことが出来ないで、響の灘の波風が穏やかになり、あなたが受け入れてくれるようになるのを待つことです。

返し、法師

響の灘は穏やかになることがないようだが、そのまま通わない舟があるとは聞かないことだ。二人の仲も絶えることはありませんまい。

〔補説〕 相如に対して大納言君は返歌しなかったのか、法師がなだめるような歌を返しているが、『相如集』にはこの返歌がない。同集には、大納言君関係の歌として、この他に、

大納言の君に、まだしかりし時のことなるべし

あふことをたなる君をいほの上にかかせて見るは久しかりけり

(相如・五八)

がある。木船注釈は、大納言君は「名門女子の気位高く」、「おのが意に満たぬ夫相如を、てんで寄せつけようとしなかったらしい」と見る。また、父の伊尹はじめ、その子女や光昭らが死去したり出家したりで後見を失ったために女三宮家に出仕するようになったと推測し、相如との関係もその頃と考えている。女三宮は村上天皇皇女保子内親王で、永延元(九八七)年八月に薨去している。木船氏の考えに立つと、大納言君の宮仕えは、天元五(九八二)年四月の光昭没後の五年間程度のこととなる。対して稲賀敬二氏は、大納言君の出仕を冷泉天皇の康保四(九六七)年頃のこととする(『女流歌人中務』)。こちらのほうが年齢などの点で

も穏当な推測であろう。大納言君が若い時期に相如との関係が始まったと考えれば、彼女が格別に気位高くて沈倫の人である相如に冷たかったということではなく、若さゆえの不寛容とも考えられよう。底本から看取できるように、中務を中心に、和歌をよくする家の一員として睦ましい時期もありつつも、相如の他の女性との関係等から不満が多くなり、不仲になっていったのではないだろうか。

二三八・二三九番歌

やんごとなき桜折りて

人知れぬ我が身なりせば山桜花見に来んと言はましものを

返し

花見ると言ひがてらにて人知れず折るとも風に散らさずもがな

〔異同〕 やんごとなき↓またひと(西・前・歌)、桜折りて↓さくらを

みて(西) さくらをおりて(歌・前)、人しれぬ↓人しらぬ(西)、なりせば↓ならずは(西・歌)、山ざくら↓やどながら(西・歌)、はな見にこんと↓はなみにことも(西・前) 花見にもこと(歌)

〔他出〕 なし

〔語釈〕 ○やんごとなき桜 他例を見出しがたい表現。ひとまず「格別に美しい桜」と解す。○人知れぬ 「人知れぬ」と詠み出す場合、「思ひ」 「我が通い路」などと続ける恋歌が圧倒的に多い。「人知れぬ我が通い路」の関守は宵々ごとにも寝ななむ(古今・恋三・六三二一業平)。当該贈答も、恋人同士の贈答として、解釈を試みる。○山桜花見に来んと

「無名の身ならば、山桜を見に行く」という本文は意図を解しがたい。ひとまず、男が女に向かつて、「無名の身ならば、あなたと共に山桜を見に出かけるのに」と呼びかけたものとして解す。他本を採った場合の解釈は、「補説」に記す。○折るとも　ここでは「桜を折る」の意に、「女性を手に入れる」という意を含ませるか。「あだ人の手向けに折れる桜花逢坂までは散らずもあらなん（後撰・離別羈旅・一三〇五よみ人しらず）。○風に散らさずもがな　「折った花を散らさないように」とは、「私との関係を大切にしていただきたいものです」の意を含むものか。

〔通釈〕　ある人が格別に美しい桜を折って、

人々に知られていない我が身であつたならば、一緒に山桜を見に行こうと言うでしょうに。

返し

花を見ると言うついでに、人に知られないように桜を手折つても、風に当って散らさないでほしいものです（人知れず結んだ私との関係を、はかなく散らさないでください）。

〔補説〕　西本願寺本・歌仙家集本では、当該贈答は、「ある人」（恋人と考えられる）と交わされた三回の贈答の三つ目に位置づけられている。三回の贈答（西本願寺本一七一―一七六番歌）の本文を以下に挙げる。

ある人

かくしつつよをや尽くさむ陸奥の阿武隈川はいかが渡らぬ

返し

阿武隈を渡りもはてぬものならばはかなはかなに我いかにせん

来たれば返したれば、又、人

秋風になびく心は葛の葉に吹きかへさるる折ぞわびしき

返事

心より吹くにもあらぬ秋風はかへる木の葉の恨みざらん

また人、桜を見て

人知らぬ我が身ならずは宿ながら花見に来とも言はましものを

返し

花見にと言ひがてらにて人しれず折るとも風に散らさずもがな

底本二三八番歌にあたる三つ目の贈答を解釈すると、「広く人に知られる我が身であつたならば、宿に居ながらにして、花見にいらっしやいと言うでしょうに」となる。前の二つの贈答を踏まえると、恋の贈答と捉えるべきだろうが、意図を捉えにくい。

底本・他本ともに解釈上の問題があり、詠歌状況も明らかではないため、校訂は行わず、ひとまず底本を基として試みの通釈を呈した。

高野 晴代（日本女子大学教授）

高野瀬恵子（日本女子大学非常勤講師）

加藤 裕子（日本大学大学院博士課程後期単位取得満期退学）

森田 直美（国文学研究資料館特任助教）

斎藤由紀子（日本女子大学大学院博士課程後期単位取得満期退学）

遠間 倫世（日本女子大学附属高等学校教諭）

曾和由記子（日本女子大学大学院博士課程後期在学）